Message 定年退職される先生からのメッセージ

心理科学部　教授
及川　恒之

2006年4月に赴任しましたので、この3月で7年間、心理科学部にお世話になったことになります。それまでは研究機関におりましたので、赴任当初は「研究中心の生活」から、言語聴覚療法学科と臨床心理学科の解剖学と生理学を担当する「教育中心の生活」への変更ということで、多少戸惑いもありました。今では何とかこなせるようになりましたが、さすがに1年目は、医学部出身でそれなりの基礎知識はあるにしても、若干専門外の授業のために、新しい講義スライドやレジュメを作るなど、再勉強で大変でした。

本学に来てから、大きく認識を変えさせられたことは、研究と同様、あるいはそれ以上に教育が重要だということです。長い研究生活の中でいつの間にか無意識に身についてしまった、世界と戦う研究の方が教育より優れているというどこか傲慢な想いは、本学で教育を行っていくうち、そうではなく、日常において病める人に地道に手を差し伸べることこそ医療従事者として最も大切だという初心に戻してくれました。それは、入学当初は頼りなく子供だった学生たちが、教育に伴い、卒業時には大きく成長し、希望をもって巣立っていくまぶしい姿を間近に見て、彼らを応援していく中で再認識させられたことです。

在籍中、小生は多くの学生との交流を通じ楽しい時を過ごさせてもらいましたが、今、大学は少子化に伴う大きな社会変化の荒波にどう迅速に対応していくのかが求められています。本学も例外ではありません。本学科について言えば、言語聴覚療法学科の存在意義をどこまで社会にアピールでき、さらに魅力ある学科を作り優れた言語聴覚士を養成できるかは今でも大きな課題ですが、その達成にはこれからは今まで以上に困難が予想されます。今後は若い教員が中心となって、言語聴覚士の社会的認知の向上と、優れた言語聴覚士養成のための高度実践教育に熱意を持って当たり、困難を克服して下さることを期待します。

最後となりましたが、多くの教員と事務の方々はじめ、学生や同窓生の皆様に支えられ、ここまで来ることができたことを心より感謝申し上げます。今後の皆様のご活躍と、本学の更なる発展を祈念致します。

平井敏博客員教授が 2012年度日本歯科医学会会長賞(研究部門)を受賞しました。

平井敏博客員教授が、日本歯科医学会の顕彰する「2012年度日本歯科医学会会長賞（研究部門）」を受賞しました。

同賞は、我が国の歯科医学系学術団体の中核組織であり、各分野間を取纏める総合的な役割を担う「日本歯科医学会」が創設した賞で、専門分科会、認定分科会、歯科大学（歯学部）、日本歯科医師会から推薦された候補者の中から7名以内に選考し、研究部門、教育部門、地域歯科医療部門の3部門において表彰するものです。

平井客員教授は、歯科医学・医術研究に成果を収めたこと、歯科医学・医療の向上に特に顕著な貢献をしたことが認められ、今般「研究部門」において受賞しました。平井客員教授は、今般受賞した7名を代表し「これまでの活動は、決して一人では行うことはできず、そこには常に多くのスタッフがいた。すなわち、今般の受賞はそういったスタッフ全員の努力の賜物である。」と謝辞を述べられました。

なお、北海道医療大学からは2人目の受賞者となり、1998年に冨田喜内元学長が「教育部門」において受賞して以来となる大変名誉ある賞です。

札幌市立高等学校との連携事業 2012年度看護学科体験学習プログラムを実施しました。

2013年1月9日（水）、札幌市立高等学校（札幌開成高等学校、札幌清田高等学校、札幌新川高等学校、札幌平岸高等学校、札幌藻岩高等学校）の生徒47名が本学を訪問しました。この大学訪問は、昨年7月に札幌市立高等学校8校との高大連携に関する包括協定を締結後初の連携事業で、大学と高等学校の教育活動（授業等）に対する相互支援を目的に行われたプログラムです。

テーマは「体の内部の状態を知ることと看護への応用～血圧・脈・体温・呼吸の測定を中心として～」。午前中に本学看護教員による模擬講義を行い、午後からは3名1組になり、測定者・被検者・観察者の役割を交代しながらバイタルサイン（血圧・脈・体温・呼吸）の測定を実施。測定後にお互いの生活状況などをインタビューし測定値の意味を考えるなど、高校の授業とは違う大学の講義に自ら考察しながら積極的に参加している姿が見られました。

今回の体験学習プログラムが高校生の皆さんにとって、職業観の形成や進路選択・決定の助力となれば幸いです。